

なな山だより

なな山緑地の会会報 第12号 2008・7

グリーンボランティア講座がなな山で開催されました

4月26日(土)に多摩グリーンボランティア講座がなな山緑地で開催されました。午前9時半から、相田さんの司会で、高木会長、住崎さんの挨拶と今までの経過や活動の状況の説明、市役所の乙川環境課長の多摩市の緑化政策の説明、川添森木会会長のマント群落など雑木林の成り立ちについての講義がありました。

そのあと、全員で柔軟体操をしてから相田さんの先導でなな山緑地の見学が行われました。キンランなど季節の花があちこちで見られるなか、相田さんの名解説でなな山緑地の自然を十分満喫することができました。



東の山にも入り、手入れされていない山がどんな状況にあるかも理解できたようです。

午後からは、手鎌でのアズマネザサの刈りかたの実習と刈払い機の使い方の説明がありました。続いて班に分かれて刈払い機の体験実習をする予定でしたが、雨が降り出したため見学のみで終了となりました。



なな山グループから11名が参加し、また活動状況のパネルや工作の作品(枝で作った汽車、自動車、モーリーくんなど)を展示し、資料として活動記録、入会案内、なな山だより11号を配布しました。

最後は雨により、午後2時半の終了になりましたが、内容の充実した講座でした。

(写真)右上 = 川添会長の講義、左 = 相田さんの解説で自然観察、右下 = 刈払い機の使い方の説明



草の根市民基金の「交流会」に参加しました

6月28日、2006年に助成金を頂いた生活クラブ生協・ぐらん運営委員会の主催する「草の根交流会」に、高木会長以下3名が参加しました。これは、助成金の対象となった各団体が活動の成果を発表する集りで、世田谷区三軒茶屋の会場にて当日の13時から開催されました。

当会を含めて6団体が助成を受けましたが、そのうち5団体の発表があり、当会の発表順はトップでしたが、会長の挨拶に続いて、パワーポイントを使って、会の設立



から現在までの経緯、助成金による成果、今後の課題などについて10分間の報告を終えました。(写真)右 = 活動の成果発表



他の団体の発表は、在住外国人の子供たちの学習を手助けする学生、引きこもりの青年をサポートする人材を育てる会、さらにはスリランカ地震の難民の女性や子供の生活自立を助ける女性グループなど、困難に立ち向かいながら有意義な活動をされている内容でした。ブースには各団体の展示があり、当会もパネル、会報、工作などを展示しました。(写真左) = 参加したメンバー

モーリーのなな山散歩 08・6

森の仲間
モーリー
です



6月のなな山は一段と濃い緑に覆われている。春は次々と咲く草花、樹木の花で賑やかさと愛しさに溢れていたが、今はその様相をすっかり変えている。梅雨入りして雨は静かに、時に強く降る。公園や庭のアジサイはほんとに雨によく映え、またよく似合っている。

梅雨の間にも、たまに爽やかに晴れることがある。このことを五月晴れというのが本当だそう。晴れないまでも、雨の降らない曇り空も多い。なな山に入るのはこんなタイミングがいい。湿り気をたくさん含んだ空気は、作業などには汗が止まらず、体にはこたえるが、山深い幽玄な森林の趣を漂わせ、町の中とはとても感じさせない風情がある。足元に茂った草の露とぬかみかみを思えば長靴がいい。蚊取り線香も必需品だ。蚊があちこち飛び交い膚の敏感な人にはたまらなくつらい。

西の谷から入っていく。すぐのところ、あまり目立たない大木のサカキがある。この山にはヒサカキはたくさんあるが、サカキはこれだけのようだ。あまりの大木に、初めてサカキと知ったとき私の判断にちょっと自信が無かった。だがどうだろう。今、目の前のサカキに見事な花がぎっしり咲いている。その花を図鑑で確認。間違いなくサカキ(榊)だ。こんなことにも思わず感動。

坂の上りにそって、実生のコナラが元気よく伸びている。何本か生きていけるといいが、ご神木の辺りに佇むと、かすかに霧が流れるみたいに隣接する住居が霞んで見えた。オオバトソウが勢いよくのびて花を開くのも間近だ。ナツハゼ、ネジキの実が例年になく大きくしっかりついているようだ。ムラサキシキブ、ヤブムラサキの花も盛りだ。それにしても今年のドクダミの何と威勢の良いこと。梅林あたりの一面のドクダミの花畑は見事だ。

この山に三株しか見られないイチヤクソウが二株、ついに開花した。白い清楚な花の姿だ。去年は花を付けなかったので二年ぶりのお目見えだ。東の谷のコナラの切り株の上にカブトムシの残骸が乗っていた。カラスカリス、ネズミなどの小さい獣の仕業だろう。この森でこういう動物の痕跡を見るのは珍しい。タヌキの亡骸、小鳥の羽の散乱は過去に一度ずつあるが、少しずつでも森の動物たちの活動を知る手がかりが見つかるのはありがたい。これはカブトムシが既に羽化している証だ。堆肥囲いの落ち葉の天地返しをちょっと試みた。まだ幼虫も多いが蛹も見つかった。たくさんのカブトムシが見られるのもうすぐだろう。(相田記)

広げよう会員の和

リレー随筆(12)

なな山緑地の傍らに住んで

梶谷 尚

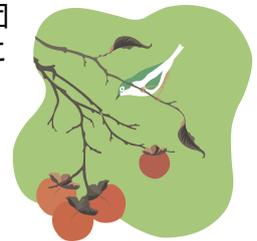
なな山緑地の東隣に移ってきてほぼ30年。引越しの車で初めて中和田通りを百草団地方面へとやってきたときには、道にかぶさる木々の枝を擦り擦り上り、えらいところに来たなと一瞬思ったがその思いはすぐに消えた。

なな山緑地の緑が心をなごませ、都心から帰ってくるとホットするのだ。そればかりではない。秋冬には二階の窓から西に富士山が見え、東には視界が開けて新宿の高層ビルが見え、夏には両国の花火も見えた。こうしてすっかり忘れていた自然が目前に一挙に現れた。

嬉しくなった早朝散歩に出ると、右手の中和田通りの谷の上が、わずかに霞みがかかっている。その下にはきっと水の流れがあるはずだ。後日、帝京大の北側を歩くと、確かに細い流れがあった。くつろぎの気分は、こんな恵まれた地勢からのみ来るのではなかった。引越した当初は、ウグイスも競うがごとく声を上げ、ムクドリやオナガもツグミもやってきた。さらに、ヒバリも杉野学園の畑の上に高く、高くあがり、子供の頃麦畑で聞いたのと全く同じ声で啼いた。

やがて年月がたち、笹藪が刈られ南面が明るくなると、秋の遅い午後に来てはツツツと啼くウグイスの声は聞けなくなり、今はヒヨドリがスズメやメジロをけちらす。それでもたまにキジバトが子供を連れてゆっくり前の空き地を横切る。なな山にはウメやヤマザクラが何本があるようだ。東の里山も活動エリアになるようであるが、笹藪も樹木も可能な限りあるがままに残していければと思う。樹木を伐採すれば、元に戻すのに50年、100年はかかるであろう。ここにはあるがままの自然がずっと残って欲しいのである。

さて次回は、いつも元気に活動されている望月さんに書いていただきたいと思います。どうぞよろしく。



ナワシロイチゴ バラ科 *Rubus parvifolius* L.

ナワシロイチゴ(写真=右上)はどこにでも生えるほふく性の落葉小低木だが、小さな刺を多く持っている。濃桃色の花は直径5mm。5個の花弁はガクよりも小さく、中心に吸い付くように開花する。6月の苗代の頃に実が熟すので「苗代苺」。別名の「サツキイチゴ」は陰暦の5月に熟すから。実(写真=左上)は深紅色で、甘酸っぱい。サクヤやリンゴ、果物のイチゴと同じバラ科だが薔はバラによく似ているが花の咲き方はバラとはずいぶん違う。



バラの歴史は古く、紀元前2000年頃のクノックス遺跡の壁画に見られる。香料として盛んに加工されていたようだ。古代ローマでは贅沢に暮らすことを「薔薇の中で暮らす」と表現し、ゴシックの聖堂には薔薇窓が設けられ、ルネッサンスにはボッティチエリの絵画「ヴィーナスの誕生」に描かれているように、古くから人々の生活の中にあり、尊ばれてきた。

近頃、日本ではオールドローズの栽培が流行したが、オールドローズに対するモダンローズは、その栽培が19世紀に飛躍的に発展した。イギリスとフランスでは専門家も愛好家も競って新種を作出し、この時代に現在のバラの基礎が作られたため、この頃を「薔薇のルネッサンス」と呼んでいる。

バラ栽培の進歩に貢献したのが、ナポレオン1世の最初の皇后ジョゼフィーヌ(1763-1814)(写真=右中)であった。ジョゼフィーヌは世界各地へ人を送って植物を収集し、それらをパリ郊外のマルメゾンの宮廷の庭に植えた。また植物学者や園芸家を援助し、バラの研究を進めた。その一人である園芸家のアンドレ・デュボン



はバラを人工交雑によって増やすことに成功し、その後の新種作りに大きく貢献した。1791年のフランスのカタログには、25品種しかなかったが、1829年には4000を超える品種が記載されているとのこと。中国から持ち込まれた原種からは四季咲性が作出され、日本から持ち込まれたノイバラ(写真=左下)は房咲性のもとなった。またジョゼフィーヌは宮廷画家のルドゥーテにマルメゾンの庭園のバラを描かせ、『バラ図譜』全3巻を刊行した(写真=右下『バラ図譜』(銅版画)より)。これは当時のバラの様子を表す貴重な資料となっている。

日本では毎年国際バラとガーデニングショーが開催されるが、バラの展示会を最初に開いたのもジョゼフィーヌであった。250以上の種と変種が展示されたと言われている。



観察記録(なな山の植物) 毎月ホームページで紹介しています。



ドクダミ(ドクダミ科)

花弁やガクはなく、雄しべと雌しべが先端に密集しています。白く花弁のように見えるのは4枚の総苞弁。別名のジュウヤクは「十薬」「重薬」で、葉や地下茎が民間薬として用いられることによります。(西、東の谷)

なな山の季節の植物を簡単なコメントと共に毎月紹介しています。ぜひホームページをご覧ください。

2008・3・23(日)雨のち晴れ 気温18

シイタケ豊作、新しい菌植え付け、活動は午前中のみ、午後はエコフェスタへ。参加者15人。
「作業」シイタケ菌植え付け、シイタケ収穫、サトイモ苗植付け準備 - 畝作り、東の山の境界にテープ設置。
「観察」見つけた植物 = モミジイチゴ、コブシ、ウグイスカグラ、キランソウ、シュンラン、ハナダイコン。

2008・3・30(日)曇りのち雨 気温8

総会の終了後作業した、シイタケまた大豊作、森の恵みは美味しい！参加者17人。
「作業」シイタケの収穫、東の山のササを刈り取り束ねる、倒したコナラの整理、タマネギの苗の植え付け。
「観察」見つけた植物 = ヒゴスミレ、ムラサキケマン、ヤマザクラ、クロモジ、ヒサカキ。

2008・4・13(日)雨時々曇り 気温10

雨にも負けず12人が集合、そのうち4人は雨の中作業！参加者12人。
「作業」散策と植物観察、シイタケ収穫(写真右上)、東山草刈り、倒木整理
「観察」見つけた植物 = コナラの発芽、キランソウ。



2008・4・27(日)曇りのち晴れ 気温18

倉庫内も道路沿いもすっきり 参加者7人。
「作業」畑のジャガイモの芽の間引きと土寄せ、畝4本作る、倉庫内の整理と棚卸し、道路沿いの電線に触れている枝の切り払いとあと整理、木工(プランター作り)。
「観察」見つけた植物 = ツクバネウツギ、コウゾの雌花・雄花、コバノガマズミ、ヤマコウバシ、ジシバリ、キンラン、ツボスミレ、チゴユリ、コウゾリナ、サルトリイバラ、ワニグチソウ、エビネ。

2008・5・11(日)雨のち曇り 気温14

朝は雨、少しずつ小降りになり昼からは曇り、順次集る。参加者9人。
「作業」サツマイモ、カボチャの苗の植え付け(写真右下)、雑草取り、東の山の倒木整理。「観察」見つけた植物 = アマドコロ、イヌシデ、ヤセウツボ、フタリシズカ、マルバウツギ、ヤマツツジ。



2008・5・25(日)雨のち曇り 気温22

朝から雨、止むのを待って午後から作業はじめる、メールを見た人が集まる。参加者9人。
「作業」畑雑草取り、土寄せ、作物の名札付け、広場の草刈り、倒したコナラの整理。
「観察」見つけた植物 = ドクダミ、サイハイラン、ガマズミ、ナワシロイチゴ。

2008・6・8(日)曇りのち晴れ 気温22

雨の予報が午前中は曇り、午後は晴れ、梅雨は何処へやら。参加者15人。
「作業」畑雑草取り、カボチャのアンドン外し、草刈り(東の出入り口、西の法面)、倒したコナラの片付け(玉切りと運び出し、薪作り)、崩れた道の修復、壊れたシイタケのホダ木立ての修理。
「観察」見つけた植物 = ムラサキシキブ、オオバトノボソウ、ヤブレガサ。



2008・6・22(日)曇りのち雨 気温21

昼まで何とかもったが、午後は雨、やはり梅雨だなぁ！^^; 参加者11人。
「作業」草刈り(広場、法面、道路沿い)、新しいホダ木立て作り、草取り(畑、コナラの生育地)。
「観察」見つけた植物 = イチヤクソウ(写真左)、コウゾの実、サカキ、ムラサキシキブ、ホウチャクソウの実、オオバジャリヒゲ、ヤブレガサ、コナスビ、ドクダミ。

なな山だより 第12号
発行
発行責任者
住所
ホームページ
編集委員

平成20年7月13日発行
なな山緑地の会
高木直樹
多摩市和田 1394 13
鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻

編集後記

今年の4～6月は雨が多く、まともに作業することができない状況でした。しかし、雨にも負けず多くの参加者があり、少しずつでも作業を続けてきました。これからの夏の暑さにも負けず、保全活動に取り組んでいきましょう。 K